真・恋姫†無双～宝慧伝～

イルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双～宝慧伝～

【Ｎコード】
Ｎ３２９８Ｙ

【作者名】
イルカ

【あらすじ】
言わずもがなの北郷一刀君。
死んで恋姫世界へ飛ばされる。という設定です。
その際、特典としてコピーロボットを貰い、いざコピーロボットと楽しいはずの恋姫世界へ！！と、乗り出したはいいのですが…。
本物一刀君→宝慧（言慧の字が出ないので）として。

コピー一刀君→天の御遣いとして。

ワイワイやっていきます。

※不定期更新。
原作崩壊。
自己満足。
ご都合主義。

序、突然死ぬなんて…え？（前書き）

死んでしまうとは情けない！

序、突然死ぬなんて…え？

序、突然死ぬなんて…え？

俺の名は北郷一刀。聖フランチェスカ学園の二年。

気が付いたら真っ白な世界にいた。

『死んでしまうとは情けない！』

突然頭に響く声。

え？何？と、訳が分からず辺りを見渡す。

３６０度、遥か地平線まで真っ白な大地が広がっていた。

『死んでしまうとは情けない！！』

何？俺に言ってんの？

『もちろん』

うわっ。頭の中の考えを読まれた。

『そのくらい造作もない』

うわっ！またしても！

『そんなのはどうでも良い。話し進めるから良く聞け――』

「つまりだ、俺は死んでしまった。違う世界に魂を飛ばしてやるからそこで生きろ。と？」　『そうだ』
「で、このサイコロを振って、行き先を決める。と？」
『ああ』
「選ばせてくれないの？」
『ん』
「つか、面倒臭そうだな、お前」
『ああ。いいから振れ。これ以上は何を言われても返事はしないからな』
「……まぁいっか。どうせ死んだ身だしな」

で、サイコロを振る。
会話中に突然降ってきたやつだ。全部で１６個ある。
その組み合わせで色々と決まるらしい。

一つ目、５
『おお、ちゃんと人がいる世界だ。良かったな』
「えっと、人がいない世界なんてあるの？」
『ほとんどの世界には人はいない。因みに、５と６が人のいる世界だった』

と、色々決まった。
『お前、中々引きが良かったな。四連続ゾロ目やら三連続ゾロ目三回なんて初めて見たよ。今のお前の人生より何倍も恵まれた状態だ』
「ほんとに？どんな状態なの？」

『まぁ聞け、これから説明するから。これも仕事だしな』
「え？仕事なの？アンタ一体何者？」
『何者でもいいだろ。説明に入る――』

行き先は三国志の世界。ゾロ目特典で文官武官が皆女性らしい。
役割、天の御遣いという所謂神の子みたいな者。これは保護属性付きで保護を受け易いらしい。
もちろんゾロ目特典。
容姿も１５０％アップ。
なんか、ゾロ目記録更新の特典でコピーロボットも貰えたし。

『これから飛ばすから』
声と同時に意識が薄れ、闇の中へと沈んだ。

次に気が付いたら荒野で寝ていた。まさに荒涼とした大地。これから群雄割拠に突入する戦乱の時代っぽい。

「先ずはどうすればいいんだろ？」
そんな事を考えて立ち上がると、胸からコピーロボットが零れ落ちた。

「思ったんだが…何の役に立つんだ？コレ」

手に取り、しげしげと観察する。と、背中に紙が張り付いていた。広げてみる。

『取り扱い説明書』

定番だな。と思いながらも読んでみる。変な機能があったら怖いしな。

読み終えると中々使い道があり、結構面白そうだった。

説明書を呼んだ俺は、試してみようとワクワクしながらコピーロボットの鼻を押した。

ムニュムニュッと動き、グニュグニュッと広がり……その場に吐いた。

いきなり吐くなって？

そりゃ無理だ。

だってアレだぜ？形が出来てから俺になるんじゃなくて、俺に成りながら形が出来てくんだぜ？

頭がグニャグニャの俺や腹から内蔵が出たり入ったり…。

「…ウォオェ……ぐぇげっ！」

思い出したらまた吐いた。

「大丈夫か？ごめんな。水でも持ってれば良かったんだが、生憎と何も持っていないんだ。これしか出来ないが許してくれ」

突然声を掛けられ、背中を擦られる。

空いたもう片方の手では、手に持った布切れで口を拭いてくれる。

うわぁめちゃくちゃ良い人だ。と思い、

「有り難う。助かりました」

と、顔を上げて振り向いてみれば……俺に似た、けれどイケメンな男が優しい笑顔で迎えてくれた。

――え？コレ…コピーロボット？

「そうだよ。俺はお前、北郷一刀のコピーさ。今後も宜しく頼むよ」

考えている事を読まれた。が、どうでもいい。便利だしな。

それより、俺に似たイケメン顔が不思議だった。

確かにコイツは俺に似てる。でも、各パーツが微妙に整っていて、絶妙な具合で纏まってる。

「ところで、誰かこっちへ向かってるみたいだ。気をつけた方がいいぞ」

そう言いながら指さす方向には砂塵があがっていた。

そして、コピーの服の袖には俺の吐瀉物がテカテカとヌメッてい

た。

――布なんか無いもんな……それより、ホント良い人だ。

コイツとなら上手くやっていけると確信したのだった。

「そこの少年、少し聞きたいのだが――」

砂塵から出てきたのは三人の少女達。

手には槍を持った、薄い青色の髪の白い服を着た少女。頭には白のナースキャップみたいな帽子を被っている。

浴衣みたいなチャイナ服みたいな…その、強調された胸の露出具合と太もものスリットが、僕にはとっても悩まし気でした。ハイ。

「はい。何か用事ですか？」

答えるのはコピー君。

だから俺は少女の観察に入った。いや、見取れてましたゴメンナサイ。

「それでは貴女達は――」

「はい。その噂を確かめる為に――」

今、コピー君と話しているのは眼鏡を掛けたキリッとした顔の少女。

首もとの白いブラウスと紫のリボン。ピシッとした草色の服に良

く似合っている。
それにしても…スーツみたいなチャイナ服みたいな服の中央に入れられたスリットが、僕にはとっても以下同文。

「それではー、そっちのイヤらしい目で風達を――」
「いえ、兄弟じゃ――」

金色の髪を膝まで伸ばしている少女がチラッと俺を見た。が、頭の上のオブジェに気を取られてるうちに、コピー君と話し始めた。
ペロペロキャンディーをオブジェに挿している。
変わった少女だった。

「では、北郷殿が天の御遣いと考えて宜しいのでは？」
「そうですねーそう考えて間違いないと思いますよー」

観察と言う名の目の保養を終えた俺は、四人の会話に混ざろうとした。
が、突然背中に衝撃を受けた。

――ん？何だ？

背中から熱が広がる。
身体を激痛が走る。
視界滲んでくる。
訳も分からぬまま、叫びたい衝動に駆られるが喉が塞がっている様な掠れた空気しか出て来ない。

滲む視界には、駆け寄るコピー君と脇を猛スピードで駆け抜ける青髪の少女。
目と口を大きく開け一瞬驚き、やはり駆けてくる二人の少女。

薄暗くなっていく視界の中、俺は立っている事も出来ず、側に駆け寄って来た少女に覆い被さる様に、崩れた。

真っ暗な世界が俺を優しく包み、背中の痛みと身体中の熱を消し去ってくれた。

――永遠に。

序、突然死ぬなんて…え？（後書き）

死んでしまうとは情けない！
ホント情けない！

【説明】取り扱い説明書（前書き）

コピーロボットの取扱い説明書

読まなくても大丈夫

【説明】取り扱い説明書

『取り扱い説明書』

『コピーロボットＤＸ－ＳＰＹ１０００のお買い上げ有り難うございます。尚、型番号のＳＰＹはスパイ用ですので、一般用よりも高性能になってます――。

【使用方法】

鼻の部分がスイッチです。押したら押した人の分身になります。

【解除方法】

使用者がもう一度本機の鼻を押して下さい。

尚、指紋認証を採用してますので、使用者でなければ解除できません。

【使用用途】

視覚と聴覚は使用者とリンク出来ます。見たい、聞きたいと思えば自動的に映像・音声が流れ込んできます。

尚、専用の録画媒体『え？こ、こんなの保存しちゃって良いの？ＤＸ－Ｐ１０００』を使用すれば、録音・録画が可能です。

※本機と使用者の信頼度により遠隔操作が可能です。

【注意事項】

本機はスパイ用ですので、衝撃吸収能力と防水機能には特化してますが、精密機械ですので電気には弱い作りになってます。

同じくスパイ用ですので、本機は使用者の指紋と声紋は再現しません。微妙にズラして再現する様に作成しました。

スパイ用ですので、使用者より体力面、精神面、知識力など全てにおいて１５０％の向上が見られます。

その為、過度の使用はご注意下さい。

これは使用者よりも本機の方が世の中の役に立つという、有る意味自殺物の本人不要説へと繋がります。

※尚、昨年のアンケートでは、

２７％が自殺。

４９％が精神的な疾患

１３％が（使用者が）他殺（嫉妬や痴情のもつれ等）にあってます。

くれぐれも使用の際には細心の注意を払ってご使用下さい。

【遠隔操作について】

信頼度により、かなり細かい命令も実行できます。

初期は右へ行けと思っても中々動いてくれません。

そんな時はアナタの喜ぶ事をしましょう。

例）

使用者（本機）の好物があるとします。

半分づつ→→→→→→信頼度少しアップ。

全部使用者が食す→→信頼度低下。

全部本機にあげる→→信頼度アップ

尚、信頼関係が崩壊する程になると命令など無視し、一人の人格として完全に独立してしまいます。

出来るだけ仲良くして下さい。

尚、使用者本人の性格により、信頼度や従順度の初期数値は大幅に変化します。

【困った時】

故障かな？と思ったら。

↓↓↓叩いて下さい。やる気がない時がほとんどです。活を入れましょう。

それでも動かない時。

↓↓↓好物を与えましょう。但し、与えすぎると甘え癖が付き、却って動かなくなるケースがあります。程々に。

それでも動かない。

↓↓↓お客様センターへ連絡を下さい。

当社お客様センター

電話↓０１２３４－○○○○○○○

メール↓○○○○○@○○．○○

ホームページ

↓只今閉鎖中。

警察、検察、裁判所からの捜査協力、捜査要請、情報開示命令等により只今閉鎖しております事を深くお詫び申し上げます。

【使用用途】

スパイ各種

非合法活動

異性との出会いから最初の数回のデートに
テストや運動会など
組み手の相手
悩み相談

――以上、正しい用法を守ってご使用して下さい。

【説明】取り扱い説明書（後書き）

読んで頂き有り難う御座います

1、俺の名は――――！（前書き）

情けないったらありゃしない！！

1、俺の名は――――！

俺の名前は本郷一刀。
と、言っていいのだろうか？
少し前までは自信を持ってそう言えた。
ただ、今の俺には自信を持ってそう言う事ができない。
だって、今は俺オブジェだし。北郷一刀は目の前にいるし。ｖｅｒ？だけど。
だから、もう、本郷一刀は必要ない。
新しく転生した者として、今までの名を捨てよう！
そう割り切る事にした。

だからこそ、敢えて言おう！

1、俺の名は――――！

『死んでしまうとは情けない！！！ホント、情けない！！！！！』

頭の中で響く。
分かってるからもう言わないで。お願い、涙出そうだから。

滲む視界で空を見上げ…る事ができないよね。
だって俺、今オブジェだし。
つか、滲む視界って…え？泣いてるの…俺……コレガ…ナミダ？
なんてやってないで現状把握。

どうやら俺は背中を刺されて死んだらしい。
目の前では今、俺の躯(むくろ)が埋められている。
参列者は三人と二個。若しくは四人と一個。
もちろん俺は『個』の方だ。もうひとつの個がコピーロボット。
の、筈なんだが…何も知らない奴は彼を一人と数えるだろう。

《北郷一刀は宝慧にクラスチェンジした♪》

頭に響いた謎の声。
――何故に最後が音符なんじゃぁぁぁーーー!!!!
叫んだところで声が出ない。　と言うか、宝慧ってこのオブジェの名前だよな？なんて思っていたら更に声が聞こえた。

《コピーロボットは北郷一刀にランクダウンした？》

――え？何？あれ…おかしいな……聞き間違いだよね？

《コピーロボットは北郷一刀にランクダウンした？》

母さん…俺……産まれて来てゴメンナサイ。

涙が出ない俺は心に涙を流して自分の埋葬に立ち会うのだった。

「皆さん、わざわざ埋葬に参列して頂き有り難うございます」

埋葬を終えてコピーロボット――もう…あっちが一刀でいいや。が三人に向かって頭を下げる。

「いや、武人である私が気付いておれば、この様な事にならなかったはず。すまない」

そう言って頭を下げる白服ナースキャップ。

「似ていましたが…ご兄弟じゃ無いとなると、どういった関係なのでしょうかー？」

俺の台座がコピー…じゃなく一刀に聞く。

「彼は私の生みの親です」

「なっ！！？」

「おぉーー！？」

「まさかっ！？」

三者三様に驚く。そりゃそうだな。見た目が同年代過ぎの親子じゃな。

「それは彼が貴方の父親と言う事なのですか？」

眼鏡っ子が聞く。

「いえ。彼は私の本体であり、私は彼と同一の存在なのです」

説明するが、いまいちピンと来ない様子の三人娘。

「簡単に言うと、私は彼の分身です」

「ほぉー、それは天の力と言う事ですかー？」

「そうです。でも、私はあくまで分身ですので何も出来ません」

「となると、本体である亡くなった方の彼が色々と出来たと言うわけですかな？」

「ん～…出来ない事は多いですが、例えば私を使えば、遠く離れた場所でも見る事が出来ますし、会話を聞く事も、話を伝える事も出来ます」

ほぉ～と、感嘆する三人娘。と俺。

そう言えば説明書にそんな事が書いてあった。

――やってみるか？

身体はないけど意識はある。俺は…意識の上じゃ――

『北郷一刀だぁぁぁーー！！！』

そう叫んで、意識を繋げる。

『おぉぉ～！！！見える！見えるぞぉー！！コピー君の視界で世界が見えるぞぉ！！！』

喜びのあまり、叫ぶ。

と、突然台座少女がビクッとした。

コピー君視界ではキョロキョロと辺りを見回す台座少女。

「どうしました？風」

眼鏡っ子が台座に話しかける。が、俺には関係ないし、それどころじゃないから無視。

今の俺の宝慧視界では世界がぐるんぐるん回ってる。
いや、なんか、気持ち悪くなって来たんですが…。お願い…止めて――。

『もういやぁ～、目が回るからお願い止めてぇぇ！』

と、台座に向かって叫んだ。
ビクッとしたと思ったら、ピタリと止まった。
と、思ったら――

ガバシッ！！！

と、俺（宝慧）を両手を伸ばして掴む。

「おい。さっきからどうしたのだ？風よ」
「彼女はどうしたんですか？大丈夫なのですか？」

ナースとコピーが台座、風と呼ばれた少女の事を心配そうに見る。

コピーアイを発動すれば、真っ青になりながら微かに震えている台座。

ん？……もしかして？

『聞こえる？俺、北郷一刀。あっ死んだ方のね。今は宝慧やってます』

「せ、せい…ちゃ…ん……りん……ちゃん……ふうは……――」

そう言い残して台座さんはヘナヘナと崩れ、倒れた。

もちろん俺も地面に激突した。何気に痛かった。

……痛覚あるんかい！

1、俺の名は――――！（後書き）

こんな調子でいきたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3298y/

真・恋姫†無双〜宝慧伝〜

2011年11月8日01時06分発行